

古文書の見方・読み方・探し方

『駿河記』を題材に岩本石見守自記史料「愛鷹山御牧の記」を検証

国立国会図書館の駿河記（写本）は上巻・下巻合わせ三十七巻で島田宿の素封家桑原藤泰（号は黙斎）の編による駿河国の地誌です。

素封家とは、大名と同じくらいの莫大な富や資産を持っている人を指します。駿河国では文久九年（1812）駿府町奉行服部貞勝が駿河国地誌の編纂を企画します。藤泰は志太郡の撰者を命じられ調査を開始しますが服部が松前奉行に転出し、また編纂を委嘱されていた六人のうち四人が途中で死亡するなどして困難を極めますが、藤泰は庵原・富士・駿東の三郡を回って前担当者の遺漏も補って文政三年（1820）『駿河記』を完成させます。

岩本石見守自記史料「愛鷹山御牧の記」とは

駿河記の附録に愛鷹山新御牧として次のような書出しがあります。

「此御牧の節は駿東郡の本巻に大旨を載たり。茲に戌寅の歳（文政元年）知恩掛川の藩中 山本忠英のもとより あし高山の記として寫しおくられけるは、則岩本石州殿の自記し給へるなり。こゝに其記を載。」とあります。

岩本石見守自記史料「愛鷹山御牧の記」は掛川藩の山本忠英より送られたものということが分かります。

また、愛鷹山新牧は「駿東郡の本巻に大旨を載たり。」とありますので、まずは本巻『駿河記』巻三十一駿東郡之二愛鷹山新牧を検証します。

本巻に記述されている「馬掛岩本石見守殿」とは長崎二丁目の天形星神社、その境内に祀られている「岩本大明神」「石見社」の岩本石見守であり天形星神社境内の石碑に記載されている徳川幕府の房総三牧における野馬方総取締旗本岩本石見守のことで十一代將軍徳川家斉の叔父にあたる人物であることでも知られています。

古文書史料「愛鷹山御牧の記」の検証と解説

本巻記載の検証史料として「愛鷹山縁起」（天保十四年 原 渡辺家（本陣）資料と「岡一色 岡一色区有文書 沼津市明治資料館」を使用します。どちらも『沼津市』史料編 近世3に収録されている資料となります。

次いで駿河記の附録に収録されている岩本石見守自記史料「愛鷹山御牧の記」を解説いたします。

○愛鷹新牧

寛政八年丙辰十一月創む。御老中戸田采女正殿、奉行は間宮筑前守殿、馬掛岩本石見守殿、巳四月廿四日より馬捕をはじめ。富士駿東二郡列卒人足を出し牧を造らしむ。

尾上牧 駿東郡中澤田山

元野牧 同 鳥谷の上 牧士六人列卒頭八人外馬捕馬引有

霞の牧 不二郡檜川の上

性古より愛鷹明神の神馬百疋ありとて捕者なかりしに、近頃新たに牧馬仕立て捕ることになりしなり。

昔頼朝卿より馬百疋愛鷹神社に奉納ありしと云傳。今御牧となりてより年々馬捕ありて、其内馬三疋づつ毎年秋奉納ある例なり。

藤泰按に、愛鷹山の野馬は往古奥野或會比奈等の官牧の種馬、干レ今残て此山に栖なるべし。然るを中古頼朝奉納の馬なりと俗の言傳へしならむ寛政中御牧になりし時の節は附録に載せここに省く。

(岩本石見守の自記「愛鷹山御牧の記」冒頭書き出し部分)

駿河の国駿東富士ふたつの郡のうちに、牧場をうち立べきよし仰せを奉りて、寛政八年十一月はじめつ方、初て彼所におもむく。東海道は安房・上総・下総の牧に行かふ道とはちがひて、よろづ事たりぬる有様なり。此度彼所にあらたに牧をとり立る事なれば、まづはこの海道の民どものつかふ駒は、いかなるこそと心にかけて、ゆくゆく」

されば家々馬持たる者はすくなし。其よしを聞ておもふに、此度駿州に牧を取立る事、下を恵給ふ御心より出で、誠に有がたき御仁政にこそとかしこみ慎みて、よくよく思ひめぐらして、かの郡のうち愛鷹山こそ牧を立るに能所ならぬ。此山にかねて立馴し駒のあるよし聞及ぬれば、愛鷹明神に詣で、そのあたりをも見めぐり侍らむと十一月五日朝日の出る頃、原のむやまを出てあし高山に登る

中澤田字いらうね捕込普請

中澤田(字いらうね) 林際捕込之内

馬踏八尺

一土手 長拾間

敷 三間

此坪四拾三坪三合

高 一丈二尺

同所

一土手 長拾三間

右同断

此坪五拾六坪三合

同所

一土手 長三拾一間

右同断

此坪百三拾四坪二合

同所

一土手 長八間

馬踏四尺

此坪四拾三坪三合

敷 弍間

同所

一土手 長拾五間

高 八尺

此坪貳拾六坪五合

合坪 二百七拾四坪五合

右絵図面□捕込土手此節より品々取掛リ、来巳正月月中旬迄ニ無遅滞仕立可申候、尤出来方見分其上不宜分は仕立直シ申付候間、念入三ヶ年之内請負可申事

野馬方 園田七幸

同掛り 中井猶之進

辰十二月

駿東郡

沼津宿

上石田村

中石田村

下石田村

岡一色村

右村々

名主

組頭

「岡一色 岡一色区有文書 沼津市明治資料館」

『沼津市』史料編 近世3

ある出来事（元野牧の捕馬を終えて）

尾上牧へ出る人足はこゝへ出てず。霞野牧へ出たる人足はまじりて出づ。おのおの人足は高割にして爰へ出れば外へは遣はず。皆しかたあり。

けふは日和よくて、暮方より勢子の者共かはるがはる酒をのむ人多ければ、夜に入て亥の刻過る頃やうやうはてたり。召つれたる者共もめでたしめでたしと悦びて原の宿へ帰るに夜の山路なればたどどしきに、山を下りて田中の道をゆくに、彌惣左衛門正能（松崎野馬方）といふ者はせ来てけふとらへて引せし駒の柳澤村の深田へ落ちて息も細し。やうやう引上て村方へ預けて薬用ひたりといふ所へ、また猶之進信之（中井野馬方元々見習）といふ者走り来て、向なる深田へ駒の落て、田のあぜに引あげたれ共、足もたゝず、いかゞせんともだえ聞ゆ。

こは如何せましとむねとどろきて、とく行て見るに、労れはてたる様にて脉も細く。舌もかはきて息もたえたえなるに、薬をかひ針をさして見ればいさゝか通ずる様なれば、猶も針さしたらば足をなほすべしと思ふに、此細道にてまたも田へおとさばすべき様もあるまじと思ひて、棒をとり寄て馬の腹の下へ通し繩にてからばさせ、手當して人足にかつがせて壱町余りもゆけば道廣き所なり。爰に置べしとて繩をとかせ、こもわらなど取寄て色々にあつかひて、又も薬を伺針をさしたれば、やがて息をふき返して足を少しうごかしたり。さればこそとおもひ、爰薬を伺ひて夜うちのしかたかうかうといひをしへて旅宿に帰りぬ。

捕馬の事など残らずすみ侍りけるをみなよろこびいへ共、二疋の駒の田へ落たるが心にかゝりて其夜は夢もむすびかねたるに、夜もはや明けゆけばとく思ひめぐらして、先うちうち若きものを遣してかの駒の様を見するに、日の出る頃帰りきて、二つとも起上りて見え侍りといふに、いとうれしくてたとへん方なし。さればとて事あつかふ者を呼て薬を持たせて、是飲ませて引来れと云含て遣すに、しばし有て引来りいつくにてか見給はんといふにより、爰にてあわて見侍りては、所の者共のさこそ思ふらめ。はや二十町余も歩み来る様ならばいさゝ心にかゝる事もなし。捕馬入置たる所に置へし。



12. 愛鷹山緣起 (天保十四年 原 波辺家(本陣)資料・沼津市明治史料館蔵)